２－２．政策セミナー

北九州市では、SDGs の達成による「住みよいまち」を実現するため、文化芸術そのものの向上だけでなく、文化芸術の力を観光や産業にも活かす創造的なまちづくりを進めている。東アジア文化都市北九州 2020▸21 のコア事業「北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs－真の豊かさのために」では、持続可能な社会を目標に掲げ、よりよい未来の構築を目指す「SDGs（Sustainable Development Goals）」をテーマとした芸術祭を開催した。

創造都市ネットワーク日本(CCNJ)では、令和 3 年度の創造都市ネットワーク会議(総会)において、新規ビジョン「多様な文化芸術創造都市の取り組みを通じて、SDGs の達成にも貢献できるプラットフォームとしての発展」が承認された。そこで、今回のセミナーでは、総会での議論を踏まえ、新規ビジョンの達成につながるグッドプラクティスを集めた事例紹介と政策討議を行うセミナーを開催し、今後の創造都市の方向性を考えるきっかけを提供した。

開催日時	令和 5（2023）年 1 月 31 日（火）14:00～16:30（予定）
会　　場	北九州国際会議場（国際会議室）ほか　オンライン（Zoom）
主　　催	北九州市
共　　催	文化庁、創造都市ネットワーク日本（CCNJ）
事 務 局	北九州市
参加人数	80 名（会場：18 名、オンライン：62 名）（参加申込者数）
参加自治体･団体数	46 自治体・団体
次　　第	＜第１部＞ □開催地挨拶　北橋健治氏（北九州市長）（録画配信） □文化庁挨拶　髙田行紀氏（文化庁地域文化創生本部事務局長） □セミナー趣旨説明 □事例紹介 ・北九州市　井村寛子氏（北九州市市民文化スポーツ局文化部 文化創造都市推進担当課長） ・臼杵市　佐藤陽平氏（一般社団法人ひとねるアカデミー代表理事） ・丹波篠山市　堀井宏之氏（丹波篠山市副市長） ＜第２部＞ □パネルディスカッション テーマ：多彩な創造都市政策アプローチから何を学ぶのか （SDGs の実現に向けて） ・北九州市　井村寛子氏（北九州市市民文化スポーツ局文化部 文化創造都市推進担当課長） ・臼杵市　佐藤陽平氏（一般社団法人ひとねるアカデミー代表理事） 首藤英樹氏（臼杵市産業観光課食文化創造都市推進室長）

	・丹波篠山市　堀井宏之氏（丹波篠山市副市長） 【コーディネーター】北九州市立大学法学部政策科学科教授 田代洋久氏 □総括・講評　佐々木雅幸氏（CCNJ 顧問／文化庁文化創造アナリスト ／金沢星稜大学特任教授／学校法人稲置学園理事）

【全体概要】

□北橋健治氏（北九州市長）、髙田行紀氏（文化庁地域文化創生本部事務局長）の開会挨拶後にセミナーの趣旨説明があり、北九州市、臼杵市、丹波篠山市から事例紹介があった。

□北九州市は、創造都市と SDGs を組み合わせたユニークな取組として「北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs」の事例を挙げ、市民や企業等との協力を得て世界に発信したことや、芸術祭を一過性のイベントで終わらせず、未来へつなぐためのワークショップなどについて紹介した。

□臼杵市は、「食文化創造都市」の取組を始めた経緯として、豊かな自然や歴史、発酵醸造文化や伝統食、有機農業の推進などの強みと、自然に負荷を掛けない循環型産業システムを「新食文化創造」とし、それらを掛け合わせることで持続できると考えていることを紹介した。

□丹波篠山市は、農村風景や地域コミュニティなど生活文化が持つ創造性に光を当てたまちづくりを進めており、古民家再生事業や里山暮らしを追体験するツアーなどの実施により、クリエイティブ人材や起業者などの移住が増加していることを紹介した。

□パネルディスカッションでは、①SDGs を視野に入れた創造都市の到達目標とアプローチ、②創造都市・創造農村の実現に向けた検討課題、③創造都市の実現にむけた有効なアプローチ方法、について議論され、まちづくりのビジョンや多様な文化芸術がもたらす効果を、市民や事業者に丁寧に説明し、また、様々な体験を通して知ってもらうことで、協力者や移住者を増やすことができるとの意見があった。そして、多彩なアプローチを学び合うことで政策の発展を期待するとまとめられた。

□総括・講評では、三つの市の先進事例についてのコメントと、主催した北九州市への感謝が述べられた。

【北橋健治氏（北九州市長）の挨拶要旨】

創造都市ネットワーク日本（CCNJ）は、現在 122 もの自治体が加盟するまでに発展し、我が国の文化芸術の推進に寄与してきた。また、令和 4 年度からは新たなビジョン「多様な文化芸術都市への取り組みを通じて、SDGs の達成にも貢献できるプラットフォームとしての発展」を掲げ、SDGs と文化芸術の果たしうる役割について活発な議論を行ってきたが、今回のセミナーでは、新規ビジョンの達成につながる優良事例の紹介と政策討議を行うことで、今後の創造都市の方向性を考えるきっかけを提供したい。

北九州市は市民、企業、行政が一体となった公害の克服や、環境を軸としたまちづくりを行っており、2018 年にはニューヨークで開催された国連の会議に出席し、SDGs の 18 番目の目標として、アート・文化を提案した。本市では文化芸術の力を観光や産業にも活かす創造的なまちづくりを目指しており、結果としてそれが SDGs の実現につながると考えている。

【髙田行紀氏（文化庁地域文化創生本部事務局長）の挨拶要旨】

本セミナーは、先進的な自治体の取組事例や課題などを共有し、各地域の文化芸術創造都市の取組を充実させるヒントやその在り方について議論するため開催している。

昨年度に新規ビジョンに SDGs が取り入れられたため、今回はそこに焦点を当てて開催されるが、ぜひ活用してほしい。また、東京オリンピック・パラリンピックと同様に、2025 年の大阪・関西万博に向けても文化プログラム（日本博 2.0）を開催し、日本文化を発信する取組を進めており、それも活用してほしい。

文化庁の京都移転は、そもそも地方創生の一環として計画されたことであり、観光や食との連携、日本遺産や文化財保存活用地域計画などもまとめて、地域全体で文化芸術を盛り立てていただきたい。

創造都市に取り組む自治体は増えたが、そのまちの個性が一層重要になってきた。新しい取組によって個性を引き出す方法や、歴史や風土を活かすなど、総合的な取組の中で洗練されて発展する都市を支援していきたい。

【セミナー趣旨説明の要旨】

創造都市ネットワーク日本（CCNJ）は 10 年前に設立され、2014 年策定の「文化芸術立国中期プラン」の中では、CCNJ の参加団体を 2020 年までに約 170 自治体にするとの目標があったが、まだ達成できていない。

この 10 年間の社会動向として、文化芸術基本法が改正され、文化芸術の本質的価値だけでなく、社会的、経済的価値も求められるようになり、CCNJ への参加如何に関わらず、どの自治体も文化芸術創造都市として取り組むことを期待されていると解釈できる。また、国連総会では SDGs（持続可能な開発目標）が設定され、ユネスコ創造都市ネットワークでも「文化を通して SDGs 達成に貢献するに資する指標（Culture|2030 Indicators）」が作成された。さらに、CCNJ では 2018 年度のネットワーク総会で、浜松市長より「創造都市の活動と SDGs の活動は非常に親和性がある」というコメントもいただいている。

そうした中で、CCNJ の目標年次の 2020 年が過ぎ、新たなビジョンや KPI の設定が必要と考えられたため、昨年度、新規ビジョンについて検討し、「多様な文化芸術創造都市への取り組みを通じて、SDGs の達成にも貢献できるプラットフォームとしての発展」を掲げた。また、新規ビジョンの実現に向けた体制整備も進め、新たに創造農村部会と国際ネットワーク部会も立ち上げた。

そして、本日の総会では、新規ビジョンを実現するための KPI について承認いただいた。開催するセミナーや部会でともに学びながら、加盟団体や優良事例を増やしていくことでビジョンを実現したいと考えおり、本日は新規ビジョンの実現に向けた優良事例とはどのようなものかを紹介する。ビジョン実現に向けた糸口を見つけていただきたい。

【事例紹介（北九州市）の要旨】

北九州市は工業都市として栄えてきたが、深刻な公害が発生し、市民、企業、行政が一体となって取り組んだ結果、1980 年代に公害を乗り越え環境再生を果たし、2018 年には「SDGs 未来都市」に選定された。また、創造都市の実現に向け「東アジア文化都市事業」を実施し、伝統文化から現代アートまで、多様な文化事業を展開した。この創造都市と SDGs を組み合

わせたユニークな取組が「北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs」だ。副題は「真のゆたかさのために」とし、文化芸術の力で SDGs の目指す未来のビジョンを表現して世界に発信し、一人一人が行動を起こすことを願って名付けた。

開催においては、非常に多くの市民ボランティアや企業、団体の協力を得た。また、現代アート界の第一人者をディレクターに迎え、国際的にも強く発信できるクオリティーを追求して企画し、経済協力開発機構（OECD）からアジアで初めて「SDGs 推進に向けた世界のモデル都市」に選定された北九州市の、先進性やチャレンジ精神、SDGs のゴールの可視化などのテーマを念頭にプログラムを組んだ。

会場の東田エリアは、官営八幡製鐵所や博物館や美術館、環境ミュージアムが集まる場所で、文化や環境政策の中心エリアであり、環境に配慮した回遊設定を行った。アート作品には、石井リーサ明理さんによる壮大なイルミネーション、落合陽一さんによる北九州市立いのちのたび博物館の収蔵品とのコラボレーション作品、安川電機とライゾマティクスがコラボレーションした作品、藍島で地域の方々と拾い集めた漂着物で制作した淀川テクニックさんの作品などがある。

芸術祭を一過性のイベントで終わらせず、北九州市の未来やまちづくりに活かすため、今年度は SDGs、教育、アートを横断するワークショップを実施している。今回は、事前に淀川テクニックさんが映像で子どもたちに呼び掛けを行い、日常生活からごみに向き合う機会をつくり、ワークショップ後には子どもたちのゴミに対する見方に変化が見られた。

私たちは真の豊かさとは何かを考え、SDGs の達成に取り組んでいきたい。

【事例紹介（臼杵市）の要旨】

独自性×創造性＝持続可能性と考えている。独自性はまちの自然や歴史であり、創造性は文化ではないか。これらを掛け合わせると持続可能性につながる。

臼杵の独自性のブランド化を考えた時に、人も環境も「健康」なまちとして、発酵醸造文化や有機農業の推進、水源涵養の森づくりや完熟堆肥づくり、質素倹約の伝統食などの強みがあった。そこで、自然に負荷を掛けない循環型産業システムを「新食文化創造」と考え、廃棄される酒粕を養殖ブリのエサにし、生姜やカボスの搾りかすもパウダーや線香として商品にし、神社仏閣での修行体験ツアーは、体験だけでなく地球に生きる「人のあり方」を学ぶワークショップも行っている。

臼杵には根強く質素倹約の文化が残っており、華美に流されず工夫して生活を楽しむ中で創造性が育まれてきたが、持続可能性で最も重要なことは、「次世代につなぐこころ」ではないか。臼杵には荘田平五郎という偉人がおり、次世代のために私財を投じて建設した図書館が今も残っており、「ふるさと臼杵よ、文化から学びより美しい臼杵に成長せよ」との言葉も残した。そのようなことを学んだ子どもたちは、その持続可能性に誇りを持ち、「100 年目指せ学校林プロジェクト」や「臼杵の海を守る缶詰づくり」などの行動を起こした。また課題ができても新しい解決策を創造する、それが持続可能性ではないかと考えている。

ただ実際には、まちの商店街よりも有名チェーンストアの多さがまちの価値になり、臼杵市に住み続けたい中学 3 年生は 32%、生活習慣病の有病率は県内ワースト 3 位、自然や文化体験が次々と禁止になり、足元の文化を見直した上で考えなければ、何も残らなくなる。そのため、SDGs、食文化創造都市の役割は大切であり、まちの歴史や伝統文化の価値を再認

識する必要がある。

【事例紹介（丹波篠山市）の要旨】

丹波篠山市は京都、大阪、神戸から直線距離で 50ｋｍに立地する人口 4 万人の市で、昼夜の寒暖差が大きい盆地気候で特産物がおいしくなる。平成 27 年にユネスコ創造都市ネットワークに、クラフト・フォークアートの分野で加盟した。日本遺産については、「丹波篠山デカンショ節-民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶-」と「きっと恋する六古窯―日本生まれ日本育ちのやきもの産地―」の二つが認定されている。

丹波篠山市は規模が小さく、農村風景や地域コミュニティなど生活文化が持つ創造性に光を当てたまちづくりを進めており、「創造農村」として、古民家の活用や景観や環境の保全、文化芸術振興、街並みアート、環境保全型の農業、ツーリズムなどに取り組んでいる。基本的にはストックを活かし、規模拡大よりも人間性豊かなまちづくりを目指している。

2011 年に歴史文化基本構想を策定したが、それ以前から歴史文化が息づく町、城下町、農村、宿場町を 100 年後まで持続させるにはどうすべきか、創造的な継承を考えて取り組んでおり、古民家の再生も市民中心で取り組んできた素地があった。その後も、景観計画やまちづくり条例、ノオト宣言、ふるさとの森づくり条例などを策定し、市民や事業者と考えてきたが、それが創造農村であり、結果として SDGs につながった。

株式会社ノオトは NIPPONIA ブランドの古民家ホテルを運営し、一般社団法人ウィズささやまは暮らしのツーリズムを実施している。ノオトは現在、31 地域で古民家再生事業を進めており、暮らしや歴史、文化資産を生業として活かすことで、結果として暮らしや歴史遺産を守り、創造産業を起こしている。ウィズささやまは「里山暮らし 5 日間」というツアーを企画し、地域の日常の暮らしを追体験し、暮らすように泊まる、人に会いに行く旅を提供し、ツアーに参加した方が移住され、現在その方がツアーガイドをされている。

【パネルディスカッションの概要】

□初めに、コーディネーターの田代氏から、文化芸術をハブとして中心に置き、周りに様々な政策分野を置いた図が示され、それぞれの地域の課題特性によって文化芸術をどのように取り込み展開するか、また、SDGs の多様なゴールに至る多彩な経路の存在についての説明があった。そして、論点を①SDGs を視野に入れた創造都市の到達目標とアプローチ、②創造都市・創造農村の実現に向けた検討課題、③創造都市の実現にむけた有効なアプローチ方法、の三つに絞り議論したいとの提案があった。

■論点①、②について

□北九州市からは、「文化芸術のまち」が「SDGs 未来都市」につながると位置付けられており、豊かな文化資源や土壌といった強みを活かし、新たな付加価値の創出や地域の活性化を図ることで創造都市の実現を目指すことについて説明があった。また、一番重要なことは担い手の支援・育成であり、東アジア文化都市事業のレガシーや市民の文化芸術活動を未来につなぎ、若者・子どもたちにつないでいく取組を進めたい。また、ものづくりや環境という市の独自性・強みとなる分野に文化芸術をかけあわせることで、まちの創造性を高めていきたい。創造都市への取組により文化行政への期待を高めて効果を説明するこ

とが重要との話があった。

□臼杵市からは、まちの食文化や歴史を支えてきた、水をはじめとした環境を次世代につなぎ、食文化を活かした産業振興に取り組むためには、市民の理解と参画したくなる土壌づくりが重要であり、ストーリーブックや映画祭なども活用して楽しみながら学び、事業者や市民による受入体制の整備を進め、規模の小さな事業者への補助等も検討しているとの話があった。また、ユネスコ創造都市ネットワークの総会に出席し、世界の都市が SDGs を意識した食料問題などの高い視座を持っていることに感銘を受けたため、今後は環境やフェアトレードなどをテーマにした食のフェスティバルの開催も検討すると述べられた。

□丹波篠山市からは、2013 年に策定した推進計画で、暮らしに結び付いた創造産業の育成を最終目標と位置付けて創造農村の実現に取り組み、ユネスコ創造都市の認定を受けたこと、その後、総合計画に引き継がれたことが説明された。また、地域コミュニティの再生と創造が、結果として景観や祭礼などだけでなく生活の維持につながるため、そのための担い手、人材育成に力を入れており、ふるさと教育や空き家バンクの設置等による移住支援についても、段階を踏んで地域に関わっていただくように配慮しており、文化芸術人材の移住や育成につながっているとの話があった。さらに、地の利を活かしたテレワーク人材の受入については、JR 西日本と連携したお試し住宅事業を実施していることが説明された。

■論点③について

□北九州市からは、庁内では文化芸術のプロジェクトを推進するため、規模や横断する分野に応じた推進体制をつくり進めており、例えば東アジア文化都市事業では、実施体制として文化芸術と産学官、市民による実行委員会をつくり、総合プロデューサーやディレクターと、市民ボランティア、学校、企業などとの協働による事業展開を見据えた体制づくりを実施したことが説明され、多様なステークホルダーが独自の視点を持って交流することがまちの創造性を高めるとの意見が述べられた。

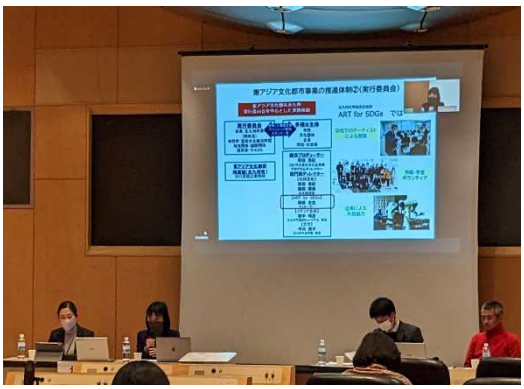
□臼杵市からは、臼杵食文化創造都市推進協議会の体制図が示され、事務局は庁内の観光・農林・移住セクションや文化財団などで構成し、市民や事業者によるワーキンググループでたたき台を作り協議会に提案する体制をつくっており、来年度からは地域振興協議会なども参画することや、アドバイザーとして立命館アジア太平洋大学が入っており、連携を進めたいとの説明があった。また、推進力のあるネットワークをつくるためには、志やビジョンを自分の言葉でしっかり説明し、不信感や不満を持つ市民を協力者に変える必要があるとの意見が述べられた。

□丹波篠山市からは、二つの事例が紹介された。ひとつは、15 年前から神戸大学と連携した学生の農家実習を行っていることで、卒業後に新規就農した人や市の職員になった人などがおり、ボランティアサークルを立ち上げて、実習終了後も来てくれる人があること、また、JR の駅にイノベーションラボという社会人の人材育成拠点を立ち上げ、卒業生が市内で多数起業していることが説明された。二つ目としては、重要伝統的建造物群保存地区に指定されている福住地区で行われているエリアマネージメント「創造的職人宿場町福住」の取組で、移住者が移住者を呼ぶ効果で古民家活用が進み、ここ 10 年で 35 の店が

起業し人口が 100 人増えたこと、タイムリーに空き家を買い取るための地域の不動産ファンド事業が検討されているとの話があった。

□最後に、コーディネーターの田代氏が、創造都市に対するアプローチは非常に多彩であり、どこにフォーカスして価値を創出するのかを学び合うことによる政策の発展を期待するとまとめられた。

【総括・講評要旨】

CCNJ の新規ビジョンは、ユネスコ創造都市ネットワーク（UCCN）が掲げているものとほぼ同じであり、UCCN に加盟している丹波篠山市や臼杵市は、ここから情報を得ながら自分たちの方針を掲げてきたこともあり、日本における創造農村の先進事例になっている。

また、北九州市の事例は、ドイツのルール工業地帯のエムシャーパークのアートプロジェクトを思い起こさせ、環境再生の取組を軸に、文化芸術をもう一つの軸として持つきっかけとして東アジア文化都市事業を活用されたことはとても素晴らしい。また、CCNJ の代表幹事を引き受けていただいたことにも感謝したい。